

学位論文審査の要旨

| | | | |
|-------|----------------------------|--|---|
| 学位申請者 | 飯田 明日美 比較社会文化学専攻2015年度生 | 論文題目 | 『悲劇の誕生』の「芸術家＝形而上学」 ——仮象の生成としての世界を美的に肯定すること—— |
| 審査委員 | 主 査: | 中野 裕考 准教授 | インターネット公表 |
| | 副 査: | 三浦 謙 准教授 | |
| | 副 査: | 宮下 聡子 准教授 | |
| | 審査委員: | 井上 登喜子 准教授 | |
| | 審査委員: | 前田 佳一 准教授 | |
| 学位名称 | 博士 (人文科学) | | |
| (英語名) | (Ph.D. in Philosophy) | | |
| | | 学位論文の全文公表の可否 : | 否 |
| | | 「否」の場合の理由 | |
| | | <input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む | |
| | | <input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある | |
| | | <input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている | |
| | | <input type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている | |
| | | <input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている | |
| | | ※本学学位規則に基づく学位論文全文の インターネット公表について | |

学位論文審査・内容の要旨

この論文は、ニーチェ『悲劇の誕生』がニーチェの思想展開において一貫して保っていた重要性を明らかにした力作です。従来の理解では、『悲劇の誕生』で提示されている「芸術家形而上学」や「根源的一者」（「根源＝一」）の思想は、後期には乗り越えられる旧時代的な二元論とみなされていました。前期に残る形而上学的残滓を力動的な「力への意志」や「永遠回帰」によって乗り越えた後期のニーチェこそが優れた哲学者だったという評価が、暗黙の裡に前提されています。このようなニーチェ理解に対して、本論文は、『悲劇の誕生』の「芸術家形而上学」「根源的一者」の核心部は、後期ニーチェにおいても維持されているという新解釈を打ち出しています。この解釈を根拠づけるべく、第1～2章で『悲劇の誕生』の「根源＝一」を多数の生成運動として捉えなおし、「芸術家形而上学」を、存在の全体を生成とみなす生成の形而上学と理解する解釈を示しています。ディオニュソス的芸術においては、弱さゆえのペシミズムではなく強さからくるペシミズムを通じた生成の肯定を試みるのが芸術家形而上学だとも論じています。この基本思想が後期にも保たれていることを示すべく、第3～4章では後期の『善悪の彼岸』『道徳の系譜』『偶像の黄昏』や草稿なども検討し、説得力のある議論を展開しています。以上の論旨を展開するにあたって、例えばハイデガー、ドゥルーズ、須藤、クラークといった代表的な先行研究を丁寧に検討し、妥当な批判を加えることで自説の補強に成功しています。さらに第5章では、従来の標準的な理解とは一線を画す別系統のニーチェ理解として近代日本の和辻哲郎の解釈を高く評価し、ニーチェ研究史の理解に一石を投じる興味深い議論を提供している点も本論文のユニークな点です。以上のように本稿はニーチェの『悲劇の誕生』に焦点を当てた論文ではありますが、ニーチェ後期の思想や、これまでの代表的な解釈や、近代日本における理解など、幅広い観点から力強い議論を展開した研究となっています。